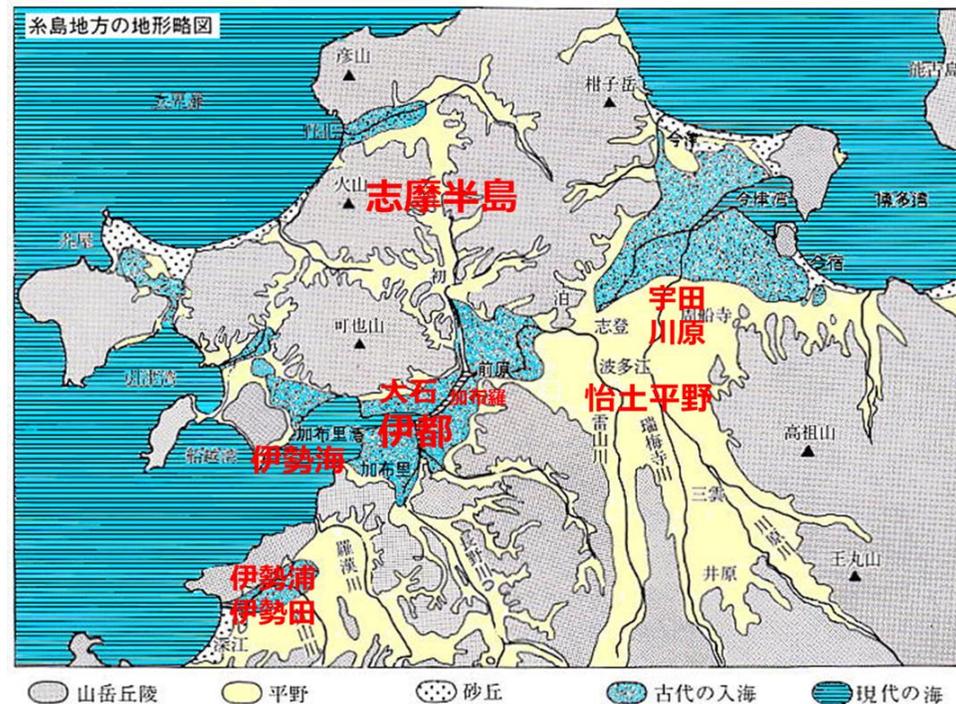


伊勢王の時代(4) 持統の伊勢行幸は無かった



多利思北孤以降の倭国（九州王朝）の天子の系譜（まとめ）

- ① **多利思北孤**（上宮法皇）は端政元年（589）に即位し、法興元32年（622）2月22日に「登遐」する。
- ② 翌**623年**『隋書』に多利思北孤の太子とある「**利歌彌多弗利**」が即位し九州年号を「**仁王**」と改元。利歌彌多弗利も父多利思北孤と共に「**聖徳太子のモデル**」となる。⇒「**聖徳年号**（629～634）」南岳禪師慧思（514～577）後身説話等。
- ④ **631年に倭国王子が唐の使者高表仁と「礼」を争う。**⑤ **利歌彌多弗利は九州年号命長7年（646）に薨去。**（命長七年の年号入り『善光寺縁起』）**翌647年に高表仁と「礼」を争った王子が即位、九州年号を「常色」と改元。**
⇒常色元年制定の「**七色十三階の冠**」や「**礼法を制定**」は常色年号の意味に相応しい

この天子は『書紀』では「伊勢王」と呼ばれたと考えられる。①『書紀』に「伊勢王」が、白雉元年（650）～持統2年（688）に10回記され、661年の薨去時に九州年号が「**白鳳**」と改元されている。②伊勢王の逝去に天皇家の皇族と他国の王の死に用いられる「**薨**」の字が用いられている③薨去後になぜか「**天下**」で活躍し重要な役目を果たす。

「伊勢王」の事績
『書紀』にちりばめられた

- | | |
|-----------------|--|
| ① 白雉元年（650）2月 | 伊勢王は白雉改元の式典で白雉の輿を5人で担ぐ。 |
| ② 齊明7年（661）6月 | 伊勢王が薨去する。九州年号「白鳳」改元。 |
| ③ 天智7年（668）6月 | 伊勢王と其の弟王が相次いで薨去する。官位不明とされる |
| ④ 天武12年（683）12月 | 諸王五位の伊勢王は 天下を巡行し、諸国の境堺を定める。 |
| ⑤ 天武13年（684）1月 | 伊勢王は諸国の境堺を定める。 |
| ⑥ 天武14年（685）1月 | 伊勢王らはまた東国に向う。 |
| ⑦ 朱鳥元年（686）1月 | 伊勢王は 高市皇子 と共に無端事（あとなしこと）に答え褒賞を得る。 |
| ⑧ 朱鳥元年（686）6月 | 伊勢王は飛鳥寺に遣され僧侶に（*天武の）病平癒を祈願。 |
| ⑨ 朱鳥元年（686）9月 | 浄大肆伊勢王は（*天武の）殯の儀で、 諸王を代表して誄す。 |
| ⑩ 持統2年（688）8月 | 浄大肆伊勢王は（*天武の） 葬儀を主催する |

「持統天皇の伊勢行幸」とは(1)

692年に持統天皇の伊勢行幸とこれを諫める三輪朝臣高市麻呂の激しい諫言があった

『書紀』によると、持統天皇は、持統6年（692）3月辛未（6日）～乙酉（20日）に伊勢に行幸。行幸の表明に際して、直大弍三輪朝臣高市麻呂が、2度に亘り行幸の中止を諫言したが聞き入れられず行幸したと書かれている。
⇒これは当然のように「三重の伊勢への行幸」と考えられている。



持統の伊勢行幸の経緯

①【伊勢行幸表明】**持統6年（692）2月丁未（11日）**に、諸官に詔して曰はく、「当に三月三日を以て、伊勢に幸（いでま）さむ。此の意を知りて、諸の衣物を備ふべし」とのたまふ。陰陽博士沙門法蔵・道基に銀廿両賜ふ。

②【高市麻呂の諫言】**乙卯（19日）**に、刑部省に詔して、輕繫（かるきとらへびと）を赦したまふ。是の日に、中納言直大弍三輪朝臣高市麻呂、表を上りて敢直言（ただにまう）して、天皇の、伊勢に幸（いでま）さむとして、農時を妨げたまふことを諫（あは）め争（いさ）めまつる。

③【再度の諫言】**3月戊辰（3日）**に、浄広肆広瀬王・直広参当摩真人智徳・直広肆紀朝臣弓張等を以て、留守官とす。是に、中納言大三輪朝臣高市麻呂、其の冠位を脱ぎて（*職を賭して）、朝に撃上（ささ）げて、重ねて諫めて曰さく、**「農作の節、車駕、未だ以て動きたまふべからず」**とまうす

④【伊勢行幸出発】**辛未（6日）**に、天皇、諫に従ひたまはず遂に伊勢に幸す。

持統天皇は692年2月11日に「3月3日に伊勢に行きたい。衣類を用意せよ」と命じる。

19日に三輪高市麻呂は農事に差し支えるので行幸を諫める。3月3日行幸予定日に職を賭して中止を求める。

持統は諫めを聞かず3月6日に行幸に出発した。

「持統天皇の伊勢行幸」とは(2)

⑤【恩賞下賜】壬午（17日）に、過ぎます神郡、及び伊賀・伊勢・志摩の国造等に冠位を賜ひ、并て今年の調役を免し、復、供奉れる騎士・諸司の荷丁・行宮造れる丁の今年の調役を免して、天下に大赦す。但し盗賊は赦例に在らず。甲申（19日）に、過ぎます志摩の百姓、男女の年八十より以上に、**稻、人ごとに五十束を賜ふ。**

⑥【帰還】乙酉（20日）に、**車駕、宮に還りたまふ。**到行（おは）します毎に、輒（すなは）ち郡県の吏民を会へて、務（ねむころ）に勞（ねぎら）へ賜ひて作樂（うたまいおこし）したまふ。

通過地の国造やお供の者に恩賞を与え、天下に大赦を行う。

3月20日帰還。わずか2週間の旅行だった。

帰還してからも過大な恩賞が与えられる

⑦【帰還後の恩賞下賜】甲午（29日）に、詔して**近江・美濃・尾張・参河・遠江等の国の供奉れる騎士の戸、及び諸国の荷丁・宮造れる丁の今年の調役を免す。**詔して**天下の百姓の、困乏しくして窮れる者に稻たまはらしむ。**男には三束、女には二束。夏4月の丙申の朔丁酉（2日）に、大伴宿祢友国直大弐を贈ふ。并て賻物賜ふ。庚子（5日）に、**四畿内の百姓の、荷丁と為れる者の、今年の調役除めたまふ。**甲寅（19日）に、使者を遣して広瀬大忌神と龍田風神を祀らしむ。丙辰（21日）に、有位、親王より以下、進広肆に至るまでに、難波の大蔵の鋤賜ふこと、各差有り。庚申（25日）に、詔して曰はく、「**凡そ繫囚・見徒、一に皆原（ゆる）し散（あか）て**」とのたまふ。

⑧【牟婁郡の人にも恩賞】5月庚午（6日）に、**阿胡行宮に御しし時**に、贅進りし者**紀伊国の牟婁郡の人阿古志海部河瀬麻呂等、兄弟三戸**に、十年の調役・雑徭を服（ゆる）す。復、**挟抄（かじとり）八人**に、今年の調役を免す。

遠国よりのお供の者の税の免除や困窮者への穀物を下賜。四畿内の荷物運び人への役務免除。囚人への恩赦を行う。

伊勢で奉仕した紀伊国の牟婁郡の人に十年の調役免除。 3

不審だらけの『書紀』「持統天皇の伊勢行幸」記事

Q.何故高々2週間程度の小旅行を阻止する為に、この様に激しく抵抗し諫言を重ねるのか。

⇒飛鳥から伊勢は近距離。期間も2週間程度。職を賭して反対する理由が不明。

職を辞してでも行幸をお止めしますぞ！



Q.何故「農作業を著しく阻害する」ことになるのか。

⇒持統の伊勢行幸が農作業を大きく妨げるとは考えられない。

Q.何故伊勢旅行に際し「国造への冠位下賜・調役免除・天下大赦」等という桁違いの恩賞を贈ったのか。

⇒『書紀』に天皇の有間の湯や牟婁の湯行幸記事は多く見えるが、このようなけた外れの恩賞記事はない。

Q.「天下百姓」は何故困窮したのか。

⇒持統の伊勢行幸が百姓の困窮を招くはずはない。ほかに困窮の理由があるはず。

Q.何故行幸コースをはずれた近江・美濃・尾張・参河・遠江等から騎士、諸国から「荷丁・宮造れる丁」を大動員する必要があったのか。

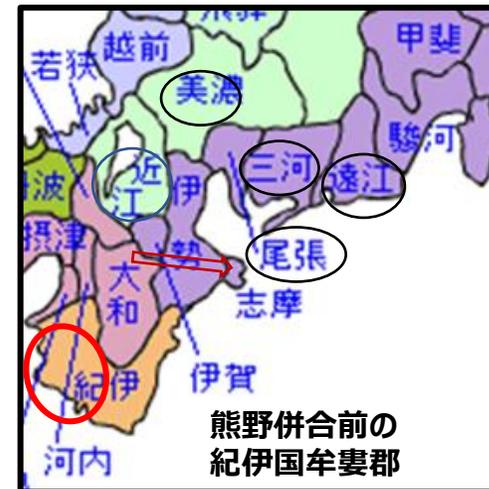
⇒飛鳥から伊勢に行く旅行なら大和・飛鳥の騎士や荷丁で十分。造ったのは阿胡「行宮」だから飛鳥から連れていか、せいぜい現地での動員・徴発で済むはず。

Q.なぜ囚人を釈放するのか。

⇒単なる天皇の行幸を理由とした大赦は考え難い。

Q.なぜ志摩郡阿胡への行幸で「紀伊国の牟婁郡の人が賛進」か

⇒紀伊国の牟婁郡は紀伊半島の反対側。兄弟三戸・舵取り8人は大船団で阿胡にいたのは偶然とは思えない。



飛鳥から伊勢までのコースから外れた騎士らが動員され、2週間程度の伊勢旅行なのに、まるで一大軍事行動をおこなうような対応になっています。



34年前に安倍比羅夫の蝦夷征伐があった



奈良大学 鎌田研究室の江戸時代の伊勢参りの研究（『宝来講道中略記』）によれば、**奈良から伊勢神宮まで約130^里に4日の行程**を要している。

神宮から英虞湾まで30^里程度で、阿胡行宮（岩波注では「所在は志摩国英虞郡」）なら更にもう2日必要。7世紀末なら**飛鳥から阿胡まで6日**はかかる。

3月6日出発なら到着は12日位、20日には帰還しているのだから、阿胡出発は14日位で**滞在は3日程度**。限られた日程の中で行宮を阿胡に設けたから、主目的は「阿胡」での**数日の休養**となる。わずか3日程度の行幸なら「**常軌を逸した規模**」となる。



34年前に安倍比羅夫の蝦夷征伐があった

伊勢行幸の持統6年（692）3月辛未（6日）を、日の干支を尊重して**34年遡上させれば、斉明4年（658）4月辛未（19日）**で、同年同月の「安倍比羅夫の蝦夷討伐」記事と重なる。

◆**斉明4年（658）夏四月に、阿倍臣、名を闕せり。船師一百八十艘を率て、蝦夷を伐つ。**齒罅田（あぎた）・淳代（ぬしろ）（*秋田・能代）二郡の蝦夷、望（おせ）り怖（お）じて降（したが）はむと乞ふ。（略）仍りて恩荷を授くるに小乙上を以てして、淳代・津輕二郡の郡領に定む。遂に有間濱に、渡嶋蝦夷等を召し聚へて、大饗して歸る。

行幸先の「伊勢」とは本当に「三重なる伊勢」なのか。行幸したのは持統なのか。

伊勢は筑紫糸島にあった

「伊勢」は、糸島半島加布里湾の「伊勢」

- 1、**神武歌謡に「伊勢」**（『書紀』神武即位前紀）◆神風の **伊勢の海の大石**にや い這ひ廻る 細螺の 吾子よ 吾子よ
細螺の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ 撃ちてし止まむ
⇒ **神武は「三重の伊勢」には行っていない**。出身は九州。神武時代に伊勢神宮を前提とした「神風の伊勢」は不審。
- 2、同じく神武歌謡に「鵜飼」⇒何故奈良の山中で「**島つ鳥 鵜養が伴**」か
◆伊那佐の山の 樹の間もよ い行きまもらひ 戦へば 吾はや飢ぬ **島つ鳥 鵜養が伴** 今助（す）けに来ね
「福岡県志摩郡北半分の場合、その北岸、**玄界灘沿いの地は、海鵜の大量繁殖地**である。」（古田武彦）。筑後川の鵜飼いの鵜も志摩から供給。神武の父は鸕鷀草葺不合尊（うがやふきあへずのみこと）。

- 3、同じく神武歌謡に「くじら」の歌⇒奈良吉野の宇陀は山の中で鯨はいない。◆『古事記』宇陀の 高城に 鳴罌張る 我が待つや **鳴は障らず いすくはし くぢら障る**
福岡市西区宇田川原（糸島半島）かつては博多湾に面する入江だった。⇒玄界灘は鯨で有名で「クジラの乗っ込み」は自然の事。

元伊都国の「加布里湾岸」に伊勢ヶ浦・伊勢田・大石

「糸島市水道事業及び下水道事業の設置等に関する条例」「マガタの一部、マガタシタ、糸島市神在（かむあり）、加布里、曲り田、**伊勢ヶ浦**の一部」の記述。伊勢ヶ浦は糸島市二丈松国のうち。船越湾の内陸。**神在村伊勢田**。また「**伊勢の海の**」とある「**大石**」地名も湾岸に遺存（糸島市志摩師吉大石）。



安倍比羅夫の水軍の出発地は糸島なる伊勢

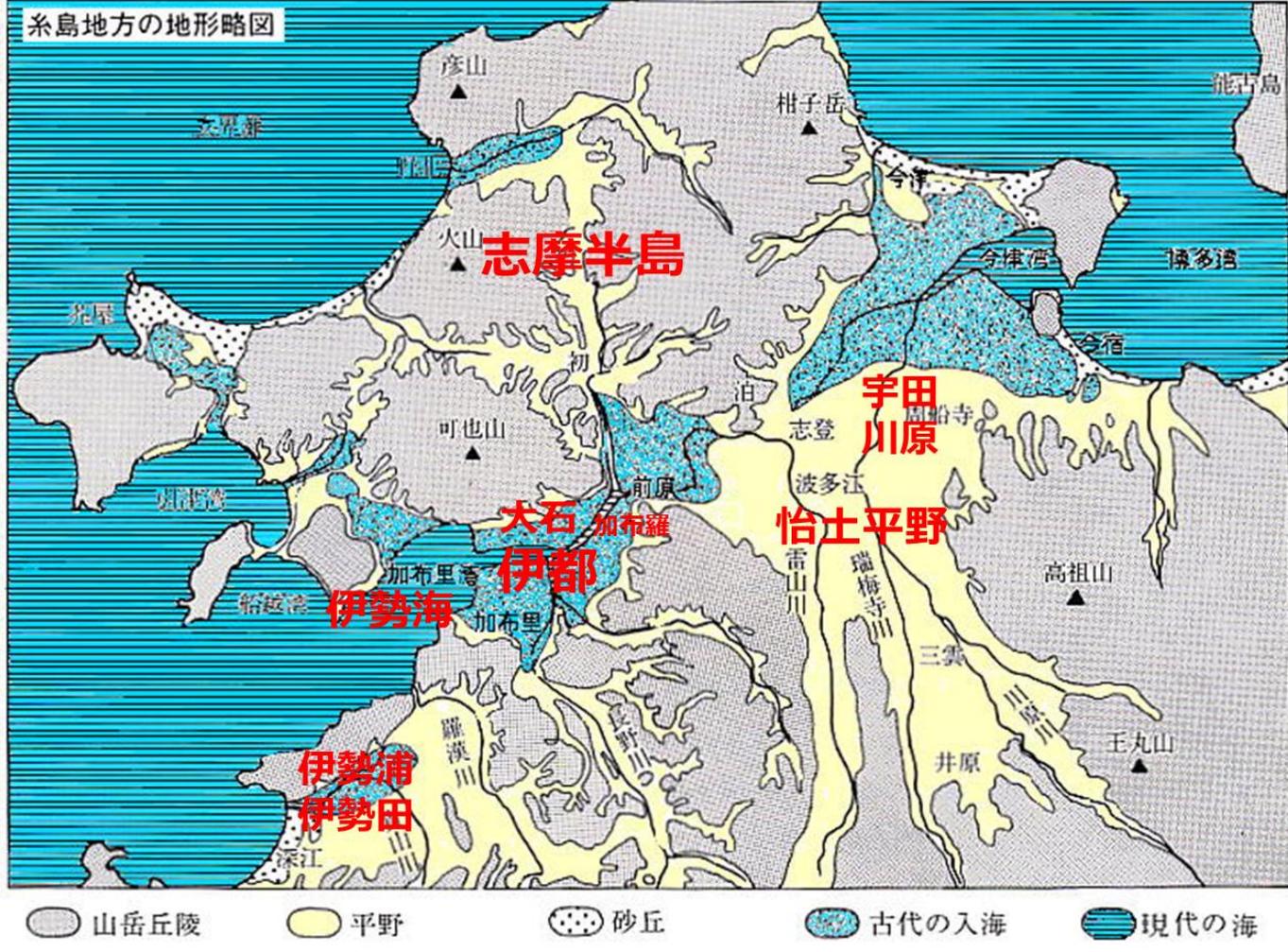
加布里湾・伊勢は倭人伝に「女王国より以北には、特に一大率を置いて檢察し、諸国はこれを畏憚（いたん・恐れはばかる）す。常に伊都国に治す。」とある**伊都国に属する古代からの軍港・軍事基地**だった。

また、7世紀においても筑紫「嶋郡」は海の軍事拠点だった事が『書紀』記事から分かる。

◆『書紀』推古十年夏四月「將軍來日皇子、筑紫に到ります。乃ち進みて**嶋郡に屯みて、船舶を聚めて（結集の意）軍の糧を運ぶ**」

この記事は糸嶋半島（旧嶋郡・怡土郡）は、軍船の集結地であったことが分かり、阿部臣率いる「船師一百八十艘」の出撃基地に相応しい。

安倍比羅夫の蝦夷討伐軍は「水軍」。糸島なる伊勢が水軍の拠点であることは『書紀』『倭人伝』から明らか。一方ヤマトに近い若狭などが水軍基地であったことを示す記事はない。



持統6年（692・九州年号朱鳥7年）の持統の伊勢行幸が、34年前658年（九州年号白雉7年）の安倍比羅夫の率いる水軍による、「糸島なる伊勢」発の蝦夷討伐戦の遂行と、その出撃を見送る伊勢王の糸島なる伊勢行幸であれば、高市麻呂の抵抗や、恩賞、東国騎士の動員、困窮者への支援などが以下のとおり自然なものとなる。

「糸島なる伊勢」発の蝦夷討伐戦出撃と伊勢王の見送りであれば自然

Q.何故高々2週間程度の小旅行を阻止する為に、この様に激しく抵抗し諫言を重ねるのか。

Q.何故「農作業を著しく阻害する」ことになるのか。

Q.何故行幸コースをはずれた近江・美濃・尾張・参河・遠江等から騎士、諸国から「荷丁・宮造れる丁」を大動員する必要があったのか。

何故彼らに大きな恩賞が与えられたのか

「戦争」であれば「農事」は不可能で、激しい諫言ももつともなこと

- ・「車駕を動かす」とは「軍隊を出動させる」意味。【駕】⑦軍隊を出動させる（角川「大字源」）。「騎士（うまいさ）」も軍事用語「乗馬した戦士」。『書紀』「騎士継踵りて進む」。
- ・当時は**軍事に際しては百姓を徴発**した。耕作が滞るのは当然のこと。
- ・働き手、収穫を失えば百姓（庶民）の困窮は必然。

⇒ **戦には農民を徴用。「困乏する天下の百姓」とは働き手を徴用された家族**

対蝦夷戦なら「伊勢行路から外れた東国騎士」の動員も自然

対蝦夷戦では、孝徳3年（647・常色元年）に淳足柵（新潟市沼垂）、4年（648）に磐舟柵（新潟県村上市磐船）が設置され越・信濃の民が柵戸（屯田兵）として配置されている。更なる蝦夷征伐では、これら陸上部隊の補強や物資補給が必要となる。また、全ての兵を遠方の港から乗船させるのは、兵士の疲労や食料備蓄が必要なことを考えれば非合理。斉明6（660）年3月の阿倍臣が船師二百艘を率いた肅慎國討伐戦では能登臣馬身龍が戦死しており、そこから「**阿倍臣船師が北陸地方の国造の率いる兵も含んで構成されていた**」ことを想像させる」（岩波『書紀』注）。

従って、**船団は「糸島の伊勢」から派遣し、軍事物資や兵士の多くは東国から徴用、戦場に近い能登や越（新潟）を經由して齧田・淳代（秋田・能代）の戦地に向かわせた。ついては、こうした「東国の騎士」や物資輸送に協力した諸国の荷丁等に恩賞を下賜したと考えれば自然なものとなる。**

消された「糸島なる伊勢」と伊勢王の蝦夷討伐戦決行と督戦（見送り）

『書紀』では蝦夷討伐は勿論、あの白村江ですら**直接の出撃地の記述がない**。遠征先の地名や戦況の詳しい記述に比べ、極めて不自然。『書紀』編者は倭弥呼以来の倭国（九州王朝）海軍の出撃基地「筑紫糸島なる伊勢」を消し、さらに658年（九州年号白雉7年）の蝦夷討伐戦の決行と督戦という伊勢王の事績を34年繰り下げて（692・九州年号朱鳥7年）「持統の三重なる伊勢への行幸」に潤色し、九州王朝・伊勢王の事跡を消したことになる。

すり替えられた「三輪朝臣高市麻呂」

壬申の乱のとき「伊勢」で活躍した「三輪子首」の時代とあう

658年では「三輪朝臣高市麻呂（657～706）」は時代が合わない。これは**672年の壬申の乱**に際して、「伊勢国」で大海人皇子（天武）を迎え、後に大和国への増援軍の**指揮官の一人**になった**「伊勢の介」「三輪子首（こびと）（～676）」の潤色**と考えられる。彼は名前や壬申の乱での経歴等が三輪高市麻呂と類似する。

① **（三輪子首）** 壬申の乱時、**伊勢の介**で、大海人皇子が**伊勢の鈴鹿**に入った時、国司守三宅石床等と共に五百人の兵を動員し皇子を助ける。その後、置始菟らと倭京に向かう軍の指揮官になり大伴吹負の許で戦う。**乱の後半の行動は不明**。天武5年（676）8月逝去。大宝元年6月に百戸を封じられた。

・672年6月甲申（24日）大山を越えて、**伊勢**の鈴鹿に至る。ここに國司守三宅連石床・**介三輪君子首**、及び湯沐令（ゆのうながし）田中臣足麻呂・高田首新家等、鈴鹿郡に参遇（まうあへ）り。則ち且た五百軍を発して、鈴鹿の山道を塞ぐ。秋7月辛卯（2日）、天皇紀臣阿閉麻呂・多臣品治・**三輪君子首・置始連菟**を遣して、数万の衆を率て**伊勢大山より越えて倭に向かう**。）

② **（三輪高市麻呂）乱の前半の行動は不明**。大伴吹負が倭京に入り大友軍の指揮権を奪取したのち、吹負の下に入り、置始菟と共に戦い、廬井鯨の軍を敗走させる。慶雲3年（706）逝去し、壬申の功で従三位を贈られる。

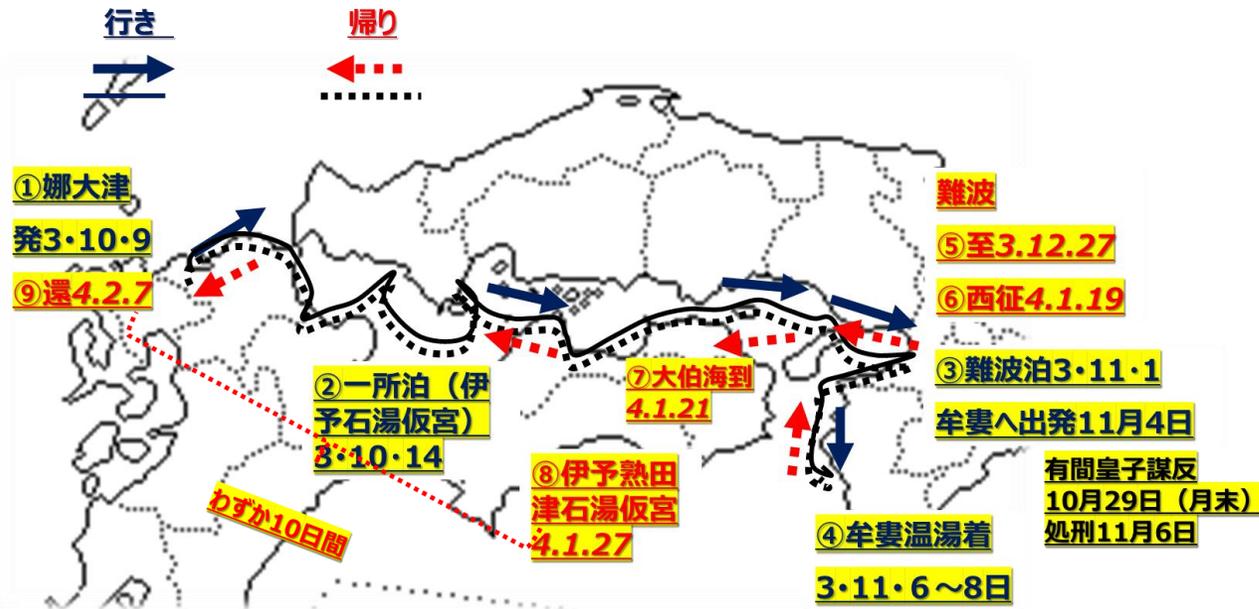
・同年6月己丑（29日）天皇大に喜びたまふ。因りて吹負に令して將軍に拜す。是の時、**三輪君高市麻呂**・鴨君蝦夷等及び群豪傑者（いさしきひとども）、響の如くに悉に將軍の麾下に会うひぬ。乃ち近江を襲はむと規（はか）る。（略）是の日、**三輪君高市麻呂・置始連菟**、上道に当りて、箸陵のもとに戦ふ。大に近江軍を破る。

34年前に「伊勢王の紀伊国牟婁への行幸」があった

斉明の航海は伊勢王の「牟婁湯行幸」記事の分割

なぜ三重の伊勢（志摩郡阿胡）への行幸で「紀伊国の牟婁郡の人が贄進」か

『書紀』で斉明は①斉明4年(658)10月に牟婁温湯に行幸②斉明7年(661)1月難波から筑紫娜大津に征西③斉明7年10月に亡骸となって娜大津から難波に航海しているが、これは前回述べた通り九州の伊勢王が斉明3年(657)10月甲子(9日)に娜大津を出発し、紀ノ國牟婁湯に行幸。斉明4年(658)2月庚申(7日)に娜大津に帰還した記事を3分割したものだ。(*これで「御船還りて娜大津に至る」「伊予から娜大津まで70日」の謎も解ける)



牟婁人への恩賞は34年前の伊勢王からの恩賞

持統6年(692)5月庚午(6日)の「紀伊国の牟婁郡の人が贄進した」記事が、34年遡上した斉明4年(658)の記事なら、**伊勢王が前年斉明3年(657)の牟婁湯滞在時に「牟婁郡の人阿古志海部河瀬麻呂等」が現地で贄進り、この功績に対し帰還後の斉明4年(658)6月庚午(19日)に恩賞を与えた**ことになる。(*持統6年5月庚午(6日)を34年遡上させると「庚午」の日は6月庚午(19日)となる)

持統の「伊勢行幸時」ではなく、34年前の伊勢王の牟婁湯行幸時なら、**紀伊国の牟婁郡の人が現地で伊勢王をもてなし、これに対し恩賞が与えられてなんの不思議もなかった。**

「阿胡 (あご) 行宮」は紀温泉付近 (紀伊国牟婁郡) にあった

万葉集の「中皇命」の紀温泉への旅歌 (10番~12番) に「阿胡」

◆ 中皇命 (なかつすめらみこと) が紀温泉に往されし時の御歌

(10番) 君が代も我が代も知るや岩代の岡の草根をいざ結びてな

(11番) 我が背子は仮廬作らす草なくは小松が下の草を刈らさね

(12番) 我が欲りし野島は見せつ底深き**阿胡根の浦の玉ぞ拾はぬ**

「紀伊国の牟婁の郡人阿古志海部河瀬麻呂」の「阿古」は牟婁の地名

紀伊国 (和歌山県) の日置川と旧熊野街道の交点、川が蛇行した河原の地域には「**和歌山県西牟婁郡白浜町安居** (あご)」が有る。ここは熊野参詣の古道「紀伊路」中の「大辺路」に位置し、かつては安居の渡しが設けられる交通の要所だった。また、その河口 (「あご」の「根」) 付近には、紀州きっての景勝地の「志原」「志原海岸」もあり、「**阿古『志海』部河瀬麻呂**」は牟婁の現地地名・現地状況とも一致する。



万葉3257番：**紀の国の浜に寄るとふあわび玉** 拾ひにと言ひて行きし君 いつ来まさむ

「挟抄八人」は筑紫からの船団の総舵手

真珠は志摩半島の英虞湾が有名だが、真珠の母貝がもっぱらアコヤ貝となったのは近世で、**古代はアワビからとれる「鮑玉」が中心**だった。そして万葉歌にも「紀の国」が鮑玉の産地として歌われている。現代の白浜 (田辺湾) の真珠は有名で、「阿胡根の浦の玉」も紀伊国牟婁郡のものと考えておかしくない。

伊勢までは「陸路」であるのに「挟抄 (かじとり) 八人」に報奨しているが、『延喜式』では「挟抄」とは**官職の「操舵手」**を意味し、その下に櫓をこぐ水手長 (水夫長)、水手 (水夫) がつく。「8人の挟抄」なら数隻の船団 (恐らく8隻か4隻) であり、筑紫から牟婁往復の天子の船団 (御座舟及び謀反・海賊に備えた軍船か) の挟抄と思われる。(牟婁郡の挟抄とは書かれていない。)

持統の伊勢行幸は34年前の伊勢王の糸島伊勢への蝦夷討伐の督戦

**持統6年（692・「朱鳥7年」）の持統の伊勢行幸は、34年前658年「白雉7年」の、伊勢王が蝦夷討伐戦を
 決行し、阿部比羅夫の水軍を見送り、督戦するための糸島なる伊勢への行幸だった。** * 安倍比羅夫は齊明4年条には
 「越の国守」とあるが、『続日本紀』養老4年1月27日条に「**齊明朝の筑紫太宰帥、大錦上**」とある。これは比羅夫が筑紫から出撃したことを示す。

①持統2年（688）**朱鳥3年～**持統3年（689）**朱鳥4年の「蝦夷朝貢」**は**654年白雉3年～655年白雉4
 年の伊勢王への朝貢**②齊明の「3度の航海」は**伊勢王の航海**（齊明3年（657）10月甲子（9日）に娜大津を出発し、紀
 ノ國牟婁湯に行幸。齊明4年（658）2月庚申（7日）に娜大津に帰還）**記事を3分割したもの**。③**有間皇子謀反は齊明3
 年（657）10月におきた伊勢王への謀反**であり、これを名目に皇子を誅殺、ヤマトの王家に圧力をかけ、筑紫帰
 還後ただちに蝦夷討伐に乗り出した。

34年前の実際の出来事と日程

事実	持統6年（692）	齊明4年（658）	
伊勢行幸表明	2月丁未（11日）	3月丁未（25日）	齊明4年（658）2月庚申（7日）に娜大津帰還
高市麻呂の諫言	2月乙卯（19日）	4月乙卯（3日）	
再度の諫言	3月戊辰（3日）	4月戊辰（16日）	齊明4年（658）4月「安倍比羅夫、蝦夷討伐」 齊明4年なら田植え等の農繁期にあたる
伊勢行幸出発	3月辛未（6日）	4月辛未（19日）	
帰還	3月乙酉（20日）	5月乙酉（4日）	
帰還後の恩賞下賜①	3月甲午（29日）	5月甲午（13日）	
帰還後の恩賞下賜②	4月庚子（5日）	5月庚子（19日）	
有位の者に大蔵の鍬賜ふ。	4月丙辰（21日）	6月丙辰（5日）	
恩赦	4月庚申（25日）	6月庚申（9日）	
牟婁郡の人に恩賞	5月庚午（6日）	6月庚午（19日）	齊明4年（658）7月4日「蝦夷朝貢し冠位を授かる」

「常色の天子」を「伊勢王」と呼んだ

常色元年に即位した伊勢王は、649年に全国に評制を施行し、652年に難波宮を造営し、白雉と改元。
「筑紫・糸島なる伊勢」を基地とした海軍力を背景に、ヤマトの王家をはじめとする東国諸国を抑え込み**勢力を拡大**していった。そこから、**諸国は「常色の天子」を「伊勢王」と呼び畏怖することとなった**と考えられる。

万葉歌の伊勢と「五十師の原」「五十師の御井」

万葉集に「伊勢」と、そこに存する「五十師の原」「五十師の御井」の歌が記される

■万葉3234番歌 無題：やすみしし 我ご大君 高照らす 日の御子の きこしをす 御食 (みけ) つ国 **神風の伊勢の国**は 国見ればしも 山見れば 高く貴し 川見れば さやけく清し 水門なす 海もゆたけし 見わたす 島も名高し ここをしも まぐはしみかも かけまも あやに畏き **山辺の五十師 (いそし) の原にうちひさす 大宮仕へ** 朝日なす まぐはしも 夕日なす うらぐはしも 春山の しなひ栄えて 秋山の 色なつかしき ももしきの **大宮人は 天地と 日月とともに 万代にもが**
(3235番歌) **山辺の 五十師の御井は おのづから 成れる錦を 張れる山かも**

(通説) 近畿天皇家の聖地たる伊勢神宮の存する三重なる伊勢を賛美し、天皇家の弥栄を祈念する歌であり、三重なる伊勢で「五十師の原」「五十師の御井」を比定する。しかし、①**歌中の「山辺の五十師の原」や「五十師の御井」が付近に見当たらない。**②「**おのづから 成れる錦**」を紅葉とするのは、とりあえずは良しとしても、なぜ「**御井**」が「**錦を 張る山**」となるのか定かではない。そこで様々な説が出されている。

- ①**契沖**：「五十師乃原」を「いそしのはら」と読み、「磯宮」のある度会郡「伊蘇」(現伊勢市磯町)とする。(契沖『万葉代匠記』)⇒「しのはら」がなく、山辺でもない
- ②**賀茂真淵**：「五十師」は「五十鈴」の誤りと考え、五十鈴川等のある伊勢神宮(斎宮)及びその近傍とする。(賀茂真淵『万葉考』)⇒「五十鈴」の誤りは暴論
- ③**本居宣長**：「五十師乃原」を「いしのはら」と読み、持統天皇の行幸に関する歌で、鈴鹿郡山辺村(鈴鹿市山辺町)近傍の行宮(伝山辺赤人屋敷跡付近)とする。
⇒伊勢への経路と離れ、行幸根拠もない
- ④他に山田孝雄・土屋文明らの一志郡新家村(津市新家町)説や、鴻池盛広の同豊地村(松阪市嬉野)説⇒名高い山や著名な井戸がないなど**何れの論証も成立していない**

結局「三重なる伊勢」では「五十師乃原」「五十師乃御井」は見出せていない。

(図1) 三重なる伊勢・五十師乃原諸説



「山辺乃五十師乃御井」は染井神社の「染井の井戸」(福岡県糸島市大門) だった

『筑前国続風土記』(貝原益軒、1709年)「神功皇后が半島出征前に三韓討伐の必勝を祈願し、染井の井戸に鎧を沈めたところ、緋色に染まり勝利を告げた、そこで「染井の井戸」と称されるようになった。また、鎧を掛けて干した松は「鎧懸の松」として伝承され、**井戸で染まった幡を干した松も「旗染の松」として井戸背後の「染井山」山上にあった**という。

「おのづから成る錦を張る山」は染井山

染井の井戸に鎧や幡を沈めたら「おのづから＝自然に」緋色に染まり、これを山上の松に懸けて干したのが染井山。

「御井はおのづから成れる錦を張れる山」は意味不明だが、染井山と染井の井戸なら、神功皇后(九州王朝の天子の潤色)の伝承にちなんだ歌となる。



緋色の旗は神功皇后が半島出征前に山上に掲げるのに誠に相応しい「**錦の御旗**」だった

『筑前国続風土記』卷二十一 怡土郡 染井山
高麗寺村の内也。染井山靈鷲寺有。其上に熊野権現の社有。里俗の傳に曰、神功皇后三韓討給はむとて、此山に臨幸まし、て、井のほとりに来り給ひ、**異国を討んに勝利を得べきならば、此鎧緋色に染るべし。**若勝事を得ずんば、本の色成べしとて、**鎧を井の水に浸したまひければ、忽緋に染りぬ。其鎧を染給ひし井なりとて、染井と名付て今に在。**(此井は染井の本社へ行道側、谷の方に在。本社より西に當る。其廣は方三尺六寸あり。)此故に染井山と號す。扱さて右の染給ひし鎧を、**山の上なる松木に懸て干給ひける。**此松は鎧懸の松とて、慶長の初迄大木ありしが今は枯てなし。其松の在し側に緋威の石とて有。其石長五間、高一間、上の平なる處、疊三疊を敷くばかり、少しかたぶける所又同じ。凡六疊を敷くばかり有。緋威の鎧を懸給ひし松の側に在故に、緋威の石とは云成べし。又**薬師堂の後の山に、旗染松連大なる松有。**其木の本、周めぐり匝五圍、甚大なる樹也。(略)是は**神功皇后旗を染て干し給ひし**故に此名有。(略)此山昔は**豊玉姫鎮座**まし、**上宮中宮下宮**とて三所をしめ、**神廟尊くして、さばかり繁栄の地也**しとかや**(殷賑を極めた地)**。今は唯其名のみ残れり。(略)凡此地の風景佳なる事他に異なり。尤遊見して幽賞すべき靈地也

長田王は山辺の御井・伊勢に行って歌を詠んだ

長田王（摂津大夫～737）は「染井の井戸」を見た際に伊勢娘子に会った

◆和銅五（712）年壬子四月長田王伊勢齋宮に遣しし時、山辺御井に作る歌（万葉81番）**山辺の御井を見がてり神風の伊勢娘子（をとめ）どもあひ見つるかも**（82番）うらさぶる心さまねし（重なる、次々とうかぶ）ひさかたの天のしぐれの流らふ見れば（83番）海の底沖つ白波龍田山いつか越えなむ妹があたり見む
右二首今案ずるに御井にて作る所に似ず。若疑（けだし）當時誦われし古歌かこの歌は和銅5年に長田王が三重伊勢に派遣された時の歌とされる。ただ、「御井を見がてり（「見がてら」の古形）」とあるとおり「御井」見物が目的で、「伊勢娘子」はその際の出来事という位置づけだが、**「三重の伊勢」では「見るに値する」井戸は見出し得ない。**



（中西進が語る「魅力の深層」）**山の辺の御井は齋宮にあるのではない。御井を見ることを主とし、その上に伊勢少女に会ったという、ふしぎな一首である。**古歌を口ずさんだか、それこそ九州派遣の折の歌か、である。もし後者なら、いかにも心細そうな口ぶりも理解できるし、上にあげた（*次に掲げる）九州の歌と脈絡がつき、歌の空虚感もよく理解できる。



長田王は筑紫に派遣され肥後水島に渡っている

長田王、**筑紫に遣され水嶋に渡る**時の歌二首

（245）聞きしごとまこと尊くすしくも神さびをるかこれの水島。（246）芦北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波立つなゆめ（248）（又長田王作歌一首）**隼人の薩摩の瀬戸を雲居なす遠くも我れは今日見つるかも** 16

長田王の歌は隼人討伐に際し糸島の伊勢に立ち寄った際の歌

和銅5年（712）に大規模な隼人・蝦夷討伐戦があった。81～83番、245～248番もその際の歌に相応しい

- ◆『続日本紀』和銅5年（712）9月23日。北道の蝦狄・しばしば辺境を驚かす。官軍雷撃し凶賊霧消す。始めて出羽国を置く。⇒この年九州年号「大長」終わる（天（大）長九年壬子六月一日為東夷征『伊予三嶋縁起』）
- ◆和銅6年（713）4月3日。日向国の肝坏、贈於、大隅、始羅（あひら）の四郡を割きて、始めて大隅国を置く。7月5日、詔して曰はく、「…今、隼の賊を討つ將軍、并せて士卒等、戦陣に功有る者一千二百八十余人に、並びに勞に随ひて勲を授くべし」とのたまふ。⇒712年に大規模な隼人討伐が行われたことは確実。

長田王が筑紫を經由して隼人討伐に向かったのは万葉歌から確実

歌の詠まれた背景・心情と合致する

「染井の井戸」は三韓征伐の必勝を祈願し成就した井戸。そうであれば、①長田王は筑紫を經由して隼人討伐に向かう際、戦勝を祈願するため染井神社の井戸に参り、その際筑紫なる伊勢の斎宮（いつきのみや）で巫女からお祓いを受けた。②そして、隼人戦への不安を抱え戦地に向かった。その心細さが82番歌に詠まれている。③熊本に「竜田山」があり水嶋に渡るコースにあたる。83番歌には、無事帰還し妻のもとに帰れるかという不安が歌われている。

（万葉170番）日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌「嶋の宮まがりの池（勾乃池）の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず
嶋宮は『書紀』の「庭の池の中の小嶋」記事から、蘇我馬子の邸宅跡、「日並皇子尊」即ち草壁皇子の東宮とされる。しかし、次の舎人の歌からは、到底宮中の池の「小なる嶋」の描写などではなく、「海に隣接する、あるいは近傍にある宮」としか理解できない。

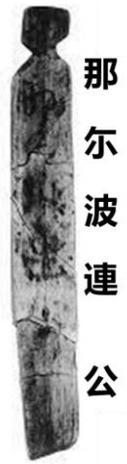
（181番）み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも（185番）水伝ふ磯の浦廻の岩つつじ茂く咲く道をまたも見むかも⇒糸島伊勢地名に「マガタ・神在」「マガタの一部、マガタシタ、糸島市神在（かむあり）、加布里、曲り田、伊勢ヶ浦の一部」伊勢の斎宮も糸島にあり「嶋の宮」と呼ばれた可能性がある。

712年の万葉81番～83番歌は、「三重の伊勢で読まれた」のではなく、長田王は筑紫を經由して隼人討伐に向かう際、染井神社に戦勝を祈願し、筑紫なる伊勢の宮で巫女に祈りを受けた、その際に詠んだ歌だと考えられる。17

分割・盗用された倭国（九州王朝）の偉大な天子伊勢王の事績

伊勢王が即位した常色元年（647）から崩御する白鳳元年（661）の間に、全国に「評制」が敷かれた。冠位が制定された。難波宮が造営された。白雉改元の儀式が行われた。
 そして、持統紀には蝦夷朝貢・伊勢行幸・吉野行幸、天武紀には難波複都詔や賜姓、斉明紀には牟婁湯行幸と筑紫への航海、有間皇子謀反と鎮圧等が各天皇の事績と記される。
 こうしたことは、『書紀』では齊明紀・天武紀・持統紀に切り分けられているが、実際は常色元年に即位した倭国（九州王朝）の天子の事績に関連するものだった。

伊勢王の時代は倭国（九州王朝）の全盛期で、筑紫糸島なる伊勢・有明海沿いの佐賀なる吉野を軍事拠点とし、その支配を全国に及ぼしていった。『書紀』編者は、そうした伊勢王の事績を分割しヤマトの齊明・天武・持統の事績としたことになる。



那波連公

持統2年（688）11月5日	654年11月	190余人	越（100）+陸奥（95）= 195人			
持統2年（688）12月12日	654年12月	213人（△18人）			城養（12）+津刈（6）= 18人	
持統3年（689）1月3日	655年1月	4人出家	▼越蝦夷1人		▼城養蝦夷3人	
齊明元年（655）7月	655年7月	209人	越の蝦夷99人	陸奥の蝦夷95人	柵養蝦夷9人	津刈蝦夷6人
			(始めは100人のはず)		(始めは12人のはず)	

